



Title	<紹介> 廣岡義隆著『萬葉風土歌枕考説』
Author(s)	北島, 紬
Citation	語文. 2022, 118, p. 70
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95234
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

廣岡義隆著『萬葉風土歌枕考説』

北 島 紬

本書は同著者による『萬葉形成通論』の姉妹編にあたり、主として『萬葉集』の風土考究および種々の歌枕・地名・地理に関する論考から成る。

序章「萬葉歌の表示について」は『萬葉集』の原文を仮名混じりで表示する場合の表記規則を示し、活用語尾や訓添えの表示のしかたについて論じたものである。漢字については『萬葉集』原表記を尊重し、仮名表記される箇所に限って平仮名に書き換えることで、「前後の接続から活用語を自在に活用させて、当時の人々は萬葉歌を読み得ていたことが明らかにする」と述べられる。

第一章「歌枕考説」は『萬葉集』における歌枕について論じる。歌枕とは、片桐洋一『古今和歌集の研究』に「単なる地名ではなく、特定の人事的觀念が結合した地名」とされるが、そのような和歌における「景」と「物」の詠み合わせが六歌仙時代より前、萬葉第二期において既に成立していたことが指摘され、そうした現実の土地とは離れた文藝上の地名の認識が存在し、作品として形成されていることが論じられている。

そのような問題意識を前提とした上で、第二章「三重の萬葉」では具体的な風土に基づく萬葉歌の特質についても述べられる。「都人の目による風土の発見」が三重萬葉の特質であり、大和国に

はない海の景色や波の寄せる岩石群が「都人の文化そのものとして展開」していると分析される。第二節「枕詞「神風の」考」は当該枕詞の成立が自然現象のみならず壬申の乱後の伊勢の神の重要性と関連していることを述べ、第三節は伊勢地域の言語上の東西認識について論じる。

第三章「三重の地域文化」では、三重地域の行政上ないし文学・歴史上の位置付けを、上代以降の網羅的な資料や大城遺跡出土の線刻土器調査といった幅広い視点から検討する。第三節「古典五景」は中日新聞三重版に連載された五編であるが、文学と風土の関わりを考究する問題意識は一貫している。

第四章「近江萬葉」では淡海における萬葉歌を「近江大津朝に關わる歌」、「道中歌」「近江国府を中心とする歌の場」に分け、特に国府宴席において詠まれた歌を想定して理解を試みる。また高市黒人の詠作について「沈思体歌」と「輕口体歌」の混在や、宴席歌や水辺文学としての性格についても明らかにする。

第五章「余滴六編」には以上に入らない論考や調査記録等が載る。「上代日本の食と農」「宇治橋断碑」「正法寺梵鐘銘・雲版識語」「ひばりのさえずりの中で」「倭花六弁」「鏡出土という口碑」の六編である。

いずれも広範な資料調査に裏付けられ、巻末の索引と合わせて萬葉研究者のみならず風土・和歌研究者にとっても重要書である。

(和泉書院、二〇二二年六月、五六八頁、一一、五〇〇円＋税)
(きたじま・つむぎ 本学大学院博士後期課程)